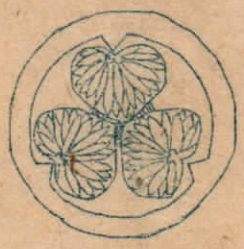
実地踏査 シリーズ" 第2弾！

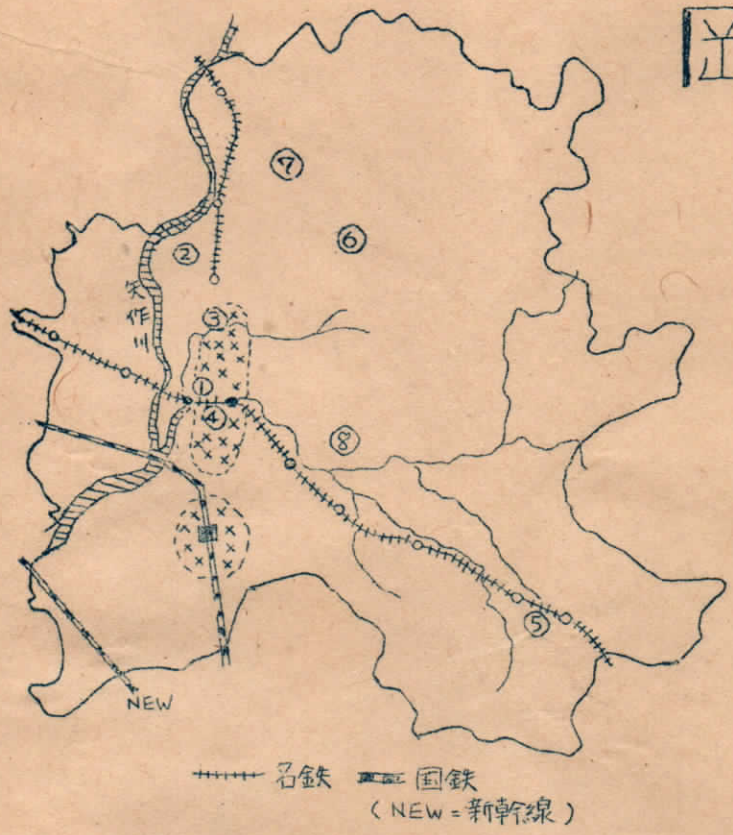
岡山市をあるこう

1969.0.29



名大・郷土研究会

岡崎市

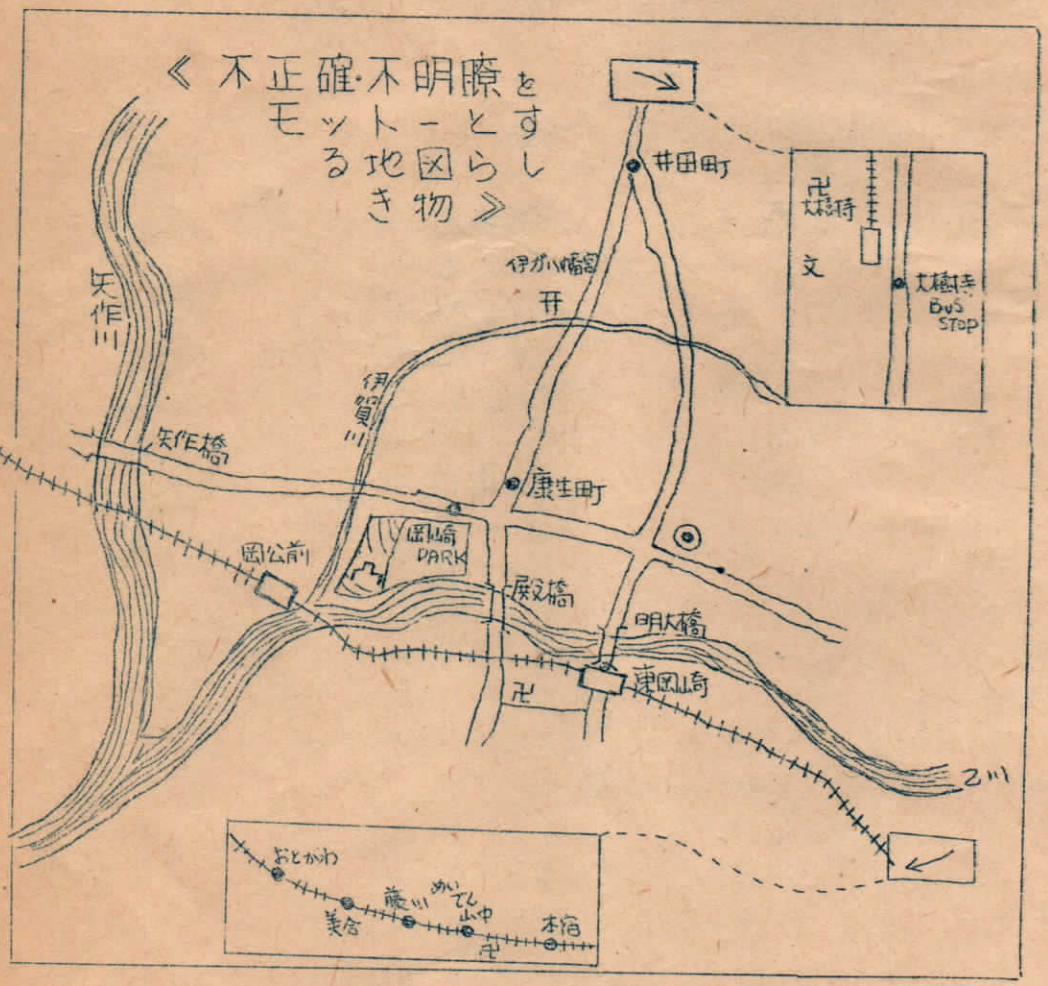


① 岡崎城
② 大樹寺
③ 伊賀八幡宮
④ 竜海寺
⑤ 法蔵寺
⑥ 滝山寺
⑦ 岩津城跡
⑧ 大岡越前守旧邸

方が数平康一め紡発名。
町有大ア集ラが有
下道流は、なをガどと
城海支後ぱ客るなそ
り、東の災っ物め業み
よぐ川戦り買占工丁
で、西三河地
市につ作。
都行。
業施
工制（家康の祖父）に矢するは、す部か0%・製
商市は、駿府は達心帯8糸火
る斗康には、市にの河国・工・
あ6清には。岸市三全績加
に1平代た而る西は紡材
部9松時っのれりでて石
史1、戸あ）さな業し。
中代江で川表と工とる
県地時、町生代街。めい
知心国れ場菅でドるじて
変中戦か宿（町一いはし
の開の川生ケてを達

岡崎藩

松平家生康、数９０代（1590年）、てで家り川５り経れた帰石し５おをのっにが忠ニな崎康、）、される広内と岡信た。）、郷、城質め崎い封西し人た岡て移の領年にた、っら代を２氏れ後、移か護地４川敗のへ江守の５今にそ松近のこ１、間河が）、年狭た。は政三照は６０稍し東吉西参康６０が城家中は氏家５元在（田に徳川氏。１義どり代（「る。川ほへは、時親至た。今年がに倉泰にれ、０ら年鎌平康まは１正



《不正確な土地境界線をすり抜ける明大寺図書館》

。れえ野にい吉形河9本
たさ与上間て国を古6期
しなをがのれ河代国て後
領が石守こさ三時総1、
を桑万後、備が野下、て、
石改2豊き完善水ががき
0大3重づが忠き、守たり。
0と後康つ城野づ防しよた
4城筑多が、水つ周領城い
7、は本代め、代福を田続
5し政に四じ耳て康石浜で
)、展吉耳多はてが平0国ま
)。発、1本を4れ松0見治
る。は後0、造6こ、4石明
入町戦6り建1、丑0が、
に下合1入閣にし25粛り
城城原、リ守ら城6、忠な
戸、が封よ天さ入て封多こ
江間関移城城。リ1移本代
康の。れ井崎によ、り、時
家こたら白岡っ田成よ耳多

参

岡崎城 歴代城主（坂すい）

				城数	1	5
1	4	5	2	（享徳元以下）	頼代	桐四	西郷	居耳	1	2
1	5	2	4	（大永4）	松平	清康	忠		1	4
		3	6	（天文5）	〃	広			1	2
		4	9	（〃18）	〈今川義元の城代〉				1	1
		6	0	（永禄3）		徳川家康			1	0
		7	0	（元亀元）		岡崎信康			7	6
		7	8	（天正7）		石川数正		（城代）	2	〉
		8	5	（〃13）		本多重次				
〈1	5	9	0	耳田中吉政		本多重代		入城す。		
1	6	0	1	（慶長6）		本多康重				
				（以下）	本多氏	三代	つづく		1	3
		4	7	（正保3）		水野忠善				
				（以下）	水野氏	六代	つづく			
1	7	6	2	（宝歴12）		松平康福				
		6	9	（明和6）		本多忠粛				
				（以後、本多氏つづく）						

岡崎城（岡崎市・康生町、岡崎公園）

▲ 五万石でも岡崎様は、お城下まで舟がつく――歌にまで唄われた岡崎城は、西郷弾正左衛門尉頼嗣が、1455年、四年の歳月を費して完成した。のである。この築城地は、西三河を一見で見渡せる高台で、東西交通の要衝に当っているが、南と西には深い沼を控え、矢作川と菅生川の合流地点であり、わずかに東北に堀をめぐらせばよく、城郭の構造自体も複雑で、重要軍事拠点として十分な働きをなしうる。

岡崎城は、竜城という異名を持っている。これはこんな伝説がもとになってつけられたものである。―― 最初にここに城を構えたのは、三河守護仁木氏の目代として西三河南部から興った西郷氏の一族、弾正左衛門頼嗣であったが、築城に際し、土地を守護する竜神が女に化して現われ永久にこの城を守ることを約束した。―― 現本丸近くに竜ノ井と称する井戸がある。

西郷氏はこの城で当時北方加茂郡松平村から興った松平氏を食い止めようとしたのであるが松平氏の進出はすさまじかった。ついに頼嗣の子頼嗣は松平信光の子光重を養子として岡崎城を譲った（1477年）。その後約50年を経て、松平清康は光重の養子信貞を岡崎城から追い、みずから入城して、松平時代が始まるのである。（1524年）

▲ 家康はこの城で生まれた。天文11年（1542）12月26日。誕生地は、本丸北の二の丸で、後に、御誕生曲輪と称され、現在は岡崎公園の小動物園・花園になっている。松平広忠の長子で、母は、刈谷城主水野忠政の娘（於大の方）である。本丸西の坂谷には産湯の水を汲んだ井戸や、胎衣を埋めた塚などが残っている。幼名竹千代、初名元信、のち元康、さらに家康と改めた。永禄3年（1560）より11年間、城主をつとめ、その間 城の拡張整備をはかった。

< 家康が元亀元年（1570）浜松城へ移ってからは、嫡男 岡崎二郎-三郎信康を岡崎城においたが、天正7年（1579）信康を自殺せしめた後は、石川数正・本多重次などを城代として、城を守らせた。この間しばしば 城の増強修補を行なっている。>

▲ 天正18年（1590）家康の関東移封後、秀吉の部将田中吉政が入城し、東西の総堀を掘るなどの 城内拡張整備につとめ、城下町の整備、寺領の整理などにもつくした。また、城下町を盛んにするために、乙川の南を通っていた街道を、城下の北側で、外濠の内側に移し、所謂《岡崎二十七曲》を完成した。これで通行の人馬が城内を通るようになった。

本多時代に入ると城も大いに修築され、天守閣も、本多康重の代、元和3年（1617）に構築されている。又元和から寛永にかけて、住居・御殿も新築され、城が 戦闘用のものから 城主権威のシンボルとして、又住居としての要素を多くもつようになってきた。

本多氏のあとに、水野氏が入り、120年間在城し、ついで松平康福の8年間の在城を経て、再び本多氏が明治維新にいたるまで在城した。

▲ 廃藩置県後は廃城となり、明治6年諸建造物は壊され、明治8年公園となって今日に及んでいる。

< 本丸周囲の濠と塁を残し、天守閣も 昭和34年、厳密な意味での復元ではなく かなり観光的要素の加わったものではあるが、工費5,700万円を投じて建てられ、その姿を再び、菅生川の川面に映している。 >

▲ 全体の縄張は複雑で、北と東に塁濠を幾重にも重ねた《連郭式》に属する。

天守は、三層三階地下一階で、東に井戸櫓、南方に附櫓を附属した複合天守である。最上層は望楼とならない後期天守の手法を示し、軒は直線的、石垣は、上縁が糸巻状に内側に彎曲した石積を示していた。

※徳川氏について ―― 岡崎との関係 ――

三河国松平郷から興り、はじめ『松平』氏を称していた。家康のとき『徳川』氏に改姓した。

松平氏は、室町時代初期の親氏（ちかうじ）のころから発展する。彼は、松平郷を中心に1ケ村を従え、二代泰親（やすちか）は、三河平野に進出、岩津（いわず）・岡崎の二城を構え、三代信光（のぶみつ）は安祥（あんじょう・安城）に進出して西三河地方をも制圧した。一族の分出も著しく、信光の子光重は西郷家に養子に入り岡崎城を譲りうけている。1524年七代清康（きよやす）は居城を安祥から岡崎に移し、三河一国を勢力下に収め、東の今川氏、西の織田氏に対抗するまでになったが、家臣に殺され松平氏の勢力は衰えた。八代広忠（ひろただ）は、諸所に流寓しのち今川氏の勢力下に入ってその援助を受けた。広忠の子家康（いえやす）は、今川氏の人質として苦労しながら成長、はじめ今川氏に属したが、桶狭間合戦により義元（今川）が死ぬと、岡崎へもどり独立して、織田信長と同盟して再び三河に勢力を回復した。1566年三河統一直後、徳川氏に改姓、1570年浜松城に移るまで岡崎城主をつとめた。

親氏 - 泰親 - 信光 - 親忠（ちかただ） - 長親（ながちか） - 信忠 - 清康 - 広忠 - 家康

（親氏・泰親・信光：松平郷 ／ 親忠・長親：安祥（安城） ／ 信忠・清康・広忠・家康：岡崎城）

大樹寺

浄土宗の大寺。文明7年（1475）、四代松平親忠が、応仁元年（1467）尾張の軍と井田野で戦い、その戦死者追善のため勅許を得て、勢誉愚底上人を開山とし一寺を建立、成道山松安院大樹寺と称した。その後、七代清康が三河を平定した際、七堂伽藍、多宝塔の造営に着手し、天文4年（1535）に竣工した。慶長7年（1602）6月、家康は、616石朱印、元和元年（1615）、松平八代の廟所を寺内に建立した。↗

↗3代将軍家光は家康・秀忠の霊殿を建立すべく、寛永18年(1641)11月、大方丈・三門・総門・鐘楼を建立 — 大方丈は安政2年(1857)炎上したが、同4年13代将軍家定の時再建なる。— 。親忠(松平No.4)以下数代の墓もあり、徳川家との縁故が深く、江戸幕府から、700石の寺領を受けていた。

寺内の多宝塔は、三間二層(一層は方形、二層は円形)の格調高い二重塔で重要文化財、総門,裏一の門・二の門・三の門,鐘楼,大方丈は県指定文化財となっている。又、大方丈障壁画は幕末の勤王画家・冷泉為恭の描いた47面であり重要文化財に指定されている。ほかに、家康の遺命『位牌は三河大樹寺に立つべきこと』により、家康の位牌と木像が安置されている。

△ 大樹寺の北 (天然記念物・ブナ科)

本堂の裏書院の北にあり、石柵を繞らしてある。本幹は古く腐朽したものとみえて、太いひこばえや枝が簇生している。その総幹囲7m95cm、枝張り東西17m、南北13m、高さ11m。樹勢は壮健である。伝によれば、これは永禄3年(1560)5月 家康の手植えという。

伊賀八幡宮 (岡崎市伊賀町)

文明2年(1470)松平忠親が、三重県の伊賀より三州額田郡下井田村へ勧請したのを創始とする。松平家の氏神として、武運長久・子孫繁栄を祈願するため八幡宮を祀り、伊賀八幡宮と号し、地名を伊賀と改めた。永禄9年には家康、徳川復姓の勅許と三河守に任ぜ

られた報賽に社頭を造営し、神殿の戸帳にその姓名を自筆して献納一。今の社殿は三代将軍家光が大掛りな改築工事をした時のものと伝えられている。(去る昭和40年から工費3600万円をかけて修復工事が行なわれた。) この八幡宮は個々の建物が江戸初期の建築を代表するばかりでなく、神社配置形式をよく残しているので珍しいといわれる。本殿、幣殿、拝殿、随身門、御供所、透塀、神橋、石鳥居は重文財。

六所神社 (岡崎市明大寺町)

38代斉明天皇が創立したと伝えられ、猿田彦命ら15柱が祭神。松平家初代の親氏(ちかうじ)が、足助川沿岸一帯を攻略して岡崎まで勢力を伸ばしたとき、東加茂郡松平町の六所山上にあった氏神の六所明神を現在の地に移したという。神社由緒には天文11年(1542)、家康誕生のとき『御産土神拝礼式』を催した、とある。それ以後、徳川代々の将軍は家康の産土神として敬い、国家安全と子孫繁栄を祈願した。残っている社殿についての記録は、家康61歳の慶長7年、社領62石7斗を寄進して造営した、というのが一番古い。のち、三代将軍家光の命により神殿の改築がなされ、現在、本殿、幣殿拝殿、神供門、桜門は重要文化財に指定されている。

龍海院 (岡崎市明大寺町)

曹洞宗の寺。松平清康(家康の祖父)は享禄3年(1530)正月元日暁方に、手の内に『是』の字を握る夢を見た。そこで、竜海院の住持・獏外和尚を召して、これを占わせたところ、和尚は、これを吉夢となし、『是』の字は、↗